様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　20 日現在

機関番号：52301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2012
課題番号：21520625
研究課題名（和文）
国語・英語作文力の相関関係と英語作文敷居レベルの研究－母語力を活かした教授法－
研究課題名（英文）
The Investigation of the Interrelationship among L1 Writing Skills, L2 Writing Skills, and L2 Proficiency, and the Threshold Level of L2 Proficiency from L1 Writing Skills to L2 Writing Skills
研究代表者
伊藤　文彦　（ITO FUMIHIKO）
群馬工業高等専門学校・一般教科（人文）・准教授
研究者番号：50413745

研究成果の概要（和文）：
日本人英語学習者の「国語作文力と英語作文力」、「英語力と英語作文力」、「国語作文力と英語力」との間には、それぞれ統計的に有意な相関関係があることが確認された。特に、「英語力と英語作文力」の相関係数は 0.45 もあり、両能力にはある一定の関連があると考えられる。本研究のもう一つの課題であった英語作文敷居レベルについては、確認することができなかった。理由は実験条件の厳格化、参加者の英語力の低さなどが考えられる。今後も、敷居レベルの有無を検証し続け、効果的な教授法を考察していきたい。

研究成果の概要（英文）：
First, the interrelationship among L1 writing Skills, L2 writing Skills, and L2 proficiency was examined with the aid of various correlational analyses. It was confirmed that the three relationships between L1 and L2 writing skills, L2 proficiency and L2 writing skills, and L1 writing skills and L2 proficiency were statistically significant. Second, the threshold level of L2 proficiency from L1 writing skills to L2 writing skills was examined; however, the clear level of L2 proficiency was not found in this population.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育・英語作文・相関・敷居レベル・英作文・writing・correlation

１．研究開始当初の背景

日本の英語教育界では、国語作文能力を視野に入れた、英語作文能力向上のための学習理論の研究が進んでいない。このため、「英語力と英語作文力」や「国語作文力と英語力」の関連を含め、「国語作文力と英語作文力」の相関関係を研究する必要があった。

また、国語作文力が英語作文力の影響要因となるためには、ある一定レベル(敷居レベル

=閾値=threshold level)以上の英語力が必要であるという仮説が指摘されて以来、長い年月が経過している。しかし、研究の難易度が高いという理由から、英語作文敷居レベルの研究は国際的にも日が浅く、海外研究から得られる知見も定まっていない。英語作文敷居レベルの研究は、英語作文学習ストラテジーを確立する上で、成果が待たれている課題であった。

２．研究の目的

本研究課題の第一の目的は、国語作文力、英語作文力、英語力という複雑に関連しあっている三要因の相関関係を研究することである。

第二の目的は、英語作文敷居レベルの存在を実証的に検証し、英語作文敷居レベルとはどの程度の英語力なのか、客観的な英語力テストを用いて調査することである。

なお本研究では、上記研究の他、断片文(Sentence Fragment)の執筆傾向や模範英語作文の量的傾向なども視野に入れて可能な限り多面的な分析を試み、日本人英語学習者が効率よく学べる教育技法を検討することとした。

３．研究の方法

(1)データの収集

169 名の群馬工業高等専門学校 3 年生、205 名の同校 4 年生(大学 1 年生相当)[計 374 名]に対し、TOEIC (Test of English as International Communication)を実施した(=英語力の測定)後、国語作文テストと英語作文テストを行った。

ただし、英語圏国からの帰国生や留学生は本研究から除くこととした。また、国語作文・英語作文・TOEIC のうち、いずれかのテストを欠席した学生も研究対象から除外した。

さらに、国語作文評点者の意見を取り入れ、200 字未満の国語作文を分析対象から外した。同様に、英語作文評点者の判断により 30 words 未満の英語作文も分析の対象から外した。本研究で使用した国語・英語作文評価基準は語数が著しく少ない作文を評価するのに適していないからである。なお、国語作文あるいは英語作文を白紙で解答した学生も分析対象外としている。

最終的に分析に使用した参加者数は 249 名となった。参加者の英語力として測定した TOEIC の平均点は 349.16 点(Listening 218.45, Reading 130.70)であった。なお、参加者は全員、日本の中等教育で英語を 6 年間学習している。

(2)方法

従前の類似研究のほとんどが同一プロンプトを使用している。同一プロンプトを使えば、後に書く方の作文に影響が出てしまうかもしれない(※つまり、高めの相関係数が算出されやすくなってしまう)。その問題点を、本研究立案時にある著名な学者からご指摘いただいたという経緯があったので、2 つの異なるプロンプトを使用することとした。異なるプロンプトではあるが、難易度が変化するのを避けるため、同レベルと思われるプロンプトを ETS(Educational Testing Service)の Criterion より選んだ。

Topic 1 Change Job or Not
Some people prefer to change jobs or professions during their careers. Others choose to stay in the same job or profession. Discuss the advantages of each choice. Which do you prefer? Use reasons and examples to explain your choice.

Topic 2 Preferred Teacher Style
Some people learn best when a classroom lesson is presented in an entertaining, enjoyable way. Other people learn best when a lesson is presented in a serious, formal way. Which of these two ways of learning do you prefer? Give reasons to support your answer.
(※英語作文未経験者が多いことは予想できていたので、テストの実施時には日本語訳を付け加えている)。

(3)データの分析

作文評価として、以下の基準を使用した。
①国語作文の採点基準
国語説明文評価表(Sasaki & Hirose, 1999)

②英語作文の採点基準
ESL Composition Profile (Jacobs, Zinkgraf, Wormuth, Hartfiel, & Hughey, 1981)

二変量の関連性の強さを測定する相関分析を用い、その有意性を検討することとした。

４．研究成果

(1)相関関係

①国語作文力×英語作文力 r=0.17**

低い正の相関が認められた。有意水準 1%で統計的に有意なので、国語作文力と英語作

文力の間には相関関係はあると思われる。しかし、高い相関関係が認められたというわけではない。プロンプトが異なるので、予想通り低い相関係数であった。

異なるプロンプトを使用(=相関係数が高くなる要因を排除)しても両能力の相関が有意であることを確認できたことは意義深く、両能力の相互効果を期待してもよいと結論付けることが可能である。しかし、係数から判断できるように関係が強いわけではないということには留意して、英語作文能力の発展に母語作文力を生かしていくことが望ましい。

② 英語力×英語作文力 r=0.43**

正の相関が認められた。また、この相関は有意水準 1%で統計的に有意であることが分かった。つまり、英語力の高い学生ほど、英語作文力も高い傾向にあると考られる。
先行研究(Sasaki & Hirose, 1996; Ito, 2004; Ito 2011)も考慮して判断すると、そのように結論付けてよいものと思われる。英語力(TOEIC)の一部指標となっている Reading と英語作文力の相関係数に至っては、0.46 と若干ではあるがさらに数値が高くなっていた。英語力と英語作文力の間にはポジティブな相互作用があると考えられるわけだが、英語作文経験が乏しく、読解が英語教育の中心となっている中等教育の現状を考えると、文法指導を含めた読解活動こそが英語作文力に大きな影響を与えている要因と考えることもできる。

③ 国語作文力×英語力 r=0.18**

低い正の相関関係が認められ、有意水準 1%で統計的に有意であった。国語作文力と英語力の間には弱いながらも相関関係があるものと推測できる。

以上、①、②、③の結果は先行研究結果と比較して、相関係数の相違はあるものの、有意であることに関しては先行研究と一致している(Sasaki & Hirose, 1996; Ito 2004)。

(2)英語作文敷居レベル

本研究のもう一つの課題であった英語作文敷居レベルについてだが、本研究参加者による実験では明確に敷居レベルを確認できなかった。現時点では仮説を否定しない(仮説を否定しなかった理由は(3)参照)。方法等に問題がなかったかどうか今後精査していく予定である。

(3)本研究における相関係数の方が Sasaki and Hirose (1996)の相関係数より低く算出された理由

Sasaki and Hirose (1996)の研究結果と本研究結果を比較すると、本研究における相関係数の方が明らかに低かった(※Sasaki & Hirose では国語作文力×英語作文力の相関係数 r=0.43**。※国語作文力の基準は Sasaki & Hirose が古いバージョンの基準表、本研究が新しいバージョンの基準表。両基準表はともに類似している。英語作文力の採点基準は同一)。現時点において推測できる原因は、Sasaki and Hirose (1996)では、同一プロンプトによる作文への影響があったのかもしれないということである。そうであるとしたら、第一言語作文力と第二言語作文力の相関関係研究時には異なるプロンプトを使用するべきではないということになるが、その判断については今後の追試等の結果を踏まえて慎重に判断しなければならない。

また、本研究参加者の英語力は低かったので、それも一因と考えられる。国語・英語作文力相関係数が低かった理由が参加者の英語力の低さから生じているのだとすれば、英語作文敷居レベルの存在を示唆しているとも考えられる(※Sasaki & Hirose の参加者の英語力は高いので国語・英語作文力の相関係数は高くなり、本研究参加者の英語力は低いので国語・英語作文力の相関係数は低くなったという考え)。

さらに、ESL Composition Profile では、英語作文低得点層を適切に序列化できなかったということも一因ではなかったかと考えている。分析的評価である ESL Composition Profile はある程度の分量が書ける英語学習者を対象としている(概ね 200～300 words)ため、英語作文が未経験でレベルが初期段階にある作文の評価基準には適していない(小室, 2001)。

(3) 断片文(Sentence Fragment)の執筆傾向

本研究参加者が執筆する英語作文には、エッセイの質を安易に低下させてしまっている断片文が数多く含まれていたので、断片文の執筆傾向を調査した。誤用断片文として著しく多かったものは Because を用いた断片文(S+V. Because S+V.)であった。顕著に現れるこの執筆傾向の理由として、(1)日本語の表現上の特徴を英語に転移している、(2)中学・高等学校の検定教科書には誤用とはならない文脈でこの表現形式が使われているという 2 点が考えられた。この研究結果は Izzo (2000)や小林(2010)らの結果と一致した。英語教師は英語作文授業時、これらのことに留意することにより、効果的な指導が可能となるであろう。

(4) 模範英語作文の量的傾向

TOEFL エッセイの量的調査を行い、模範的な英語作文とはどのような量的傾向を持っているのかということを研究した。185 の模範エッセイ(評点 6.0)を計量的に調査したところ、1 エッセイあたりの各計量値は次の通りであった。平均単語数 354.74、平均文長(1 文あたりの平均単語数)19.22 であった。三浦(1995)によれば、新聞記者の平均文長はコードでは 17～19 語が「標準」、21～24 語が「少し難しい」、25～28 語が「難しい」、29 語以上は「非常に難しい」ということである。英字新聞という視点からいえば、本研究で調査した 185 のエッセイの平均文長は、ほぼ「標準」にあたる。一般的に文長が短い英文を執筆する傾向にある日本人英語学習者は、英文執筆時に文長を意識するとよいであろう(伊藤・大井, 2011)。

また、受け身文の割合の平均は 1 エッセイ当たり 10.01%であった。受け身文の割合が平均で約 1 割を占めているということは意外なことで、新しい発見であった。ライティングの授業を行う際、受け身の文を必ず作るように指導する必要まではないであろうが、受け身文を盛り込むことが結果的に、多様な構文から構成されているエッセイを書き上げることの一因にはなり得るため、高評価につながりやすくなるという指導はあってもよいと思われる。

FRE(Flesh Reading Ease)は 56.27、FKGL(Flesh-Kincaid Grade Level)は 10.03 であった。石岡・橋本・大津(2009)によれば、2005～2008 年度のセンター本試験の英文は、FRE が 60.0～85.0 程度で、学年は小学 4 年～8 年(中学 2 年)次程度のレベルの英語が使われているとのことである。したがって、本研究言語資料である TOEFL 模範エッセイはセンター本試験よりやや高いレベルの Readability であることが分かった。

それぞれの指標値はすべて最高得点である 6.0 を獲得したエッセイの平均値なので、TOEFL Independent Writing Task の指導時や通常のアカデミックライティング練習時には、これらの平均値を計量的な目標(推奨値)とするように指導することができるであろう。

さらに、JACET 8000 を使用して語彙分析を行ったところ、1 エッセイ中の約 95%は Level 1～5 までの英単語で構成されているということが分かった。これは、Level 5 までの単語力(難関大学受験・大学一般教養程度)があれば、質の高いアカデミックエッセイを執筆することが可能であるということを示唆している。語彙という側面のみに限定はしているが、大学生であれば到達することが難しいという単語レベルではないことが確認できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
(1)
伊藤文彦(単著)
TOEFL エッセイの計量調査
全国高等専門学校英語教育学会研究論集(COCET=Council of College English Teachers)
2013 年第 32 号　査読有

(2)
伊藤文彦・大井恭子(共著)
センテンス・コンバイニング・エクササイズの指導効果検証
全国高等専門学校英語教育学会研究論集(COCET=Council of College English Teachers)
2012 年第 31 号　p.61-70 査読有

(3)
Fumihiko Ito (単著)
L2 Reading-Writing Correlation in Japanese EFL High School Students
The Language Teacher (JALT=Japan Association of Language Teachers [全国語学教育学会]
2011 年 September/October issue Vol. 35
No. 5 pp. 23-29 査読有

〔学会発表〕（計　4 件）
(1)
伊藤文彦
TOEFL エッセイの語彙分析
全国高等専門学校英語教育学会第 36 回研究大会　2012 年 9 月 7 日　国立オリンピック記念青少年総合センター

(2)
伊藤文彦・大井恭子
センテンス・コンバイニング・エクササイズの指導効果検証
全国高等専門学校英語教育学会第 35 回研究大会　2011 年 9 月 4 日　京都テルサ

(3)
伊藤文彦
TOEFL 模範エッセイの量的研究
日本英語表現学会第 40 回記念大会　2011 年

6 月 5 日　九州ルーテル学院大学

(4)
Fumihiko Ito
Overuse of Coordinating Conjunctions *and, but,* and *so,* and Misuse of Subordinating Conjunction *because* in Japanese ESL Essays
第 77 回 2010 年 4 月 28 日米国ミシシッピ大学 Southeastern Conference on Linguistics

〔図書〕(計　2 件)
(1)
大井　恭子・伊藤　文彦(共著)
英語モードが身につくライティング
研究社　2012 年　90 頁

(2)
伊藤　文彦(単著)
英字新聞の読み方と英語作文技術
アーキテクト社　2010 年　82 頁

〔その他〕
ホームページ等

「英字新聞の読み方と英語作文技術」(アーキテクト社)のストアサイト
http://academy.smallworld.jp
http://ac_main.smallworld.jp/press_ac/cgi-bin/user_interface_test/store.cgi?pcode=a0002&afilter=0

6. 研究組織
(1)研究代表者
伊藤　文彦(ITO FUMIHIKO)
群馬工業高等専門学校一般教科人文准教授
研究者番号: 50413745